淑大看栄院看紀要 B.S.N.N.G.S.N.ShukutokuU Vol.2, P47-57, 2024

研究報告

老年看護学実習におけるスケッチブックを用いたコミュニケーションの在り様 －質的統合法（KJ法）による分析－

岡本あゆみ[1]　永田文子[1]　辻育恵[1]　髙橋真斗[2]　大西杏奈[3]
淑徳大学看護栄養学部看護学科[1]　国立病院機構千葉東病院[2]　東邦大学医療センター佐倉病院[3]

Exploring students' communication with older adults through sketchbook use in gerontological nursing students' practical training: Analysis using an integrated qualitative method (KJ method)

Ayumi Okamoto[1], Ayako Nagata[1], Ikue Tsuji[1], Masato Takahashi[2], Anna Onishi[3]
[1] School of Nursing, College of Nursing and Nutrition, Shukutoku University
[2] National Hospital Organization Chiba-Higashi National Hospital
[3] Toho University Sakura Medical Center

要旨
目的：老年看護学実習でのスケッチブックを用いたコミュニケーションについて、学生がとらえたあり様を明らかにする。
方法：57名（59.4％）のスケッチブックに関する3年次の記録内容を対象に、質的統合法（KJ法）を用いて分析した。
結果：【スケッチブックの活用方法】【円滑なコミュニケーションのための工夫】【利用者の特徴に合わせた対応】【スケッチブック活用の効果】【利用者への看護学生としての承認からのコミュニケーションの促進】【スケッチブック作成・使用における困難感】の6つのシンボルマークが抽出された。
結論：学生は、対象者に合わせスケッチブックを準備し、会話やケアに使用した。スケッチブックは高齢者と学生の想起を補い、ガイド的な役割を担った。

キーワード：スケッチブック、コミュニケーション、高齢者、老年看護実習
Key Words: sketchbooks, communication, older adults, gerontological nursing students's practice

Ⅰ．はじめに

わが国では、生産年齢人口の急減および85歳以上人口の急増が見込まれるなか、持続可能な地域包括ケアシステムの構築が進められている（内閣府 2023）。そして看護の場は、医療機関や在宅だけでなく多様な施設や地域コミュニティに拡がり、多職種との連携が期待され、2021年には看護職養成のカリキュラムが見直された(厚生労働省 2019)。このような状況下、A大学の老年看護学実習場所は、特別養護老人ホーム、老人保健施設、サービス付き高齢者向け住宅、地域密着型デイサービスなどである。このような場の利用者は、介護保険施設在所者の95％以上が認知症（厚生労働省 2018）と報告されるように、認知機能の低下を伴っていることが少なくない。

看護学生が高齢者や認知症のある人と接する実習では、さまざまな要因によるコミュニケーショ

ンの困難さが報告されている。その一部は、世代差（清水 2007, 森ら 2017)、加齢変化（難聴・視力低下）・認知機能低下（認知症）・言語障害（失語症）からの意思疎通の困難さ（清水 2007, 田中他 2012, 森 他 2017, 中川 他 2019）や、認知症の高齢者との関わり体験の不足（森 他 2017）や認知症による症状を知識として理解できないこと（髙野 他 2016）である。日本の世帯構造は、単独・夫婦・親と未婚のみの子の世帯が90％を占め、3世代世帯は僅か3.8％である（厚生労働省 2021)。若い世代では、住環境や科学技術の進歩から、人間関係の希薄化が進んでいる（厚生労働省 2019）といわれ、A大学でも高齢者との同居経験がある学生は少ない。実習時には「学生が認知症の高齢者の側に行かない」「認知症の高齢者が学生から離れていく」「高齢者の記憶を引き出すことで会話が可能ではあるが、学生は無言のままでじっとしている」などの様子がみられることがあった。このことにも、先行研究に示されている高齢者側の加齢変化・認知機能低下・言語障害等からの意思疎通の困難さや、学生側の認知症の高齢者との関わり体験の不足などの多重な要因があるだろう。老人専門看護師（n=40)、認知症看護認定看護師（n=71）への調査では、約3割の入院患者に認知症または認知機能の低下があり、その6割以上に行動心理兆候、1割強にせん妄があった（日本老年看護学会老年看護政策検討委員会 2014)。臨床においても、認知症の症状を増強させない関わりのニーズは高いといえる。認知機能の低下は、高齢者にとって自己の拠り所となる独自の記憶の維持を困難にさせ、他者との新たな関係の構築に障壁を生じさせる（戸田 他 2017)。そのため、認知症のある者との関わりは、学生でなくとも難しいと考えられる。

しかし関わりが難しいからこそ、コミュニケーションのあり方には様々な工夫がある。黒川(2008)は、認知症中期以降の長文理解の困難さに応じ写真や音楽などを用いることを示している。これはClaude et al.（1964）が、人は他者とのコミュニケーションを通して、様々な情報やメッセージを受け取り解釈するが、話す・書くという狭義ではなく、音楽・芸術などの行動の包含を示していることに通じる。Bourgeois（1990）は、アルツハイマー病の患者本人が経験した写真を用い、文を添えてラミネート加工・使用し、本人の回想や会話を助けたことを報告している。また、岩澤ら(2020)はスケッチブックに雑誌の切り抜きを貼って回想を行い、会話の媒体としたことを示している。学生に関する先行研究では、時計やカレンダー（中原他 2014)、コラージュ法による切り抜き制作物の紹介（吉田 2010）の効果を示している。さらに、やまだ（2018）は、絵などのビジュアル的な媒体を用いることで、共にその媒体を見て語り合うことが可能になり、対象者が医療者との関係を主従的ではなく横並びと捉えるという変容を示している。

これらビジュアルをいかしたコミュニケーションと同じく、A大学の老年看護学実習では、10年以上前からスケッチブックを活用している。スケッチブックは、学生個人の持つ強みをいかすとともに、対象となる高齢者の強みを引き出せるように、学生が考えて準備して使用している。例えば、季節の花や自然の様子の絵や写真やちぎり絵、好みの動物、好きな歌の歌詞、写経や百人一首などの文字である。なおそれは、高齢者の好みや潜在能力のアセスメントに用いる他、好みや心身機能などの情報を得る度に、内容を改善して利用するものである。ただし、対象者がコミュニケーションにおいて、特に視覚的情報を必要としない場合には、敢えて使用することは無い。スケッチブックの使用に至るには、先出しの学生のコミュニケーションの困難さを示す研究と同じく、高齢者に視覚・聴覚や認知機能の障害などがある。今回、学生のとらえたスケッチブックを用いた高齢者とのコミュニケーションのあり様について明らかにし、使用における質の向上を目指す。

本研究の目的は、老年看護学実習における学生のとらえるスケッチブックを用いた高齢者とのコミュニケーションのあり様について明らかにすることである。

Ⅱ. 対象と方法

1. 研究対象

A大学老年看護学実習Ⅱでスケッチブックを使用

した学生のうち研究に同意した学生（57名;59.4％）の記録内容（初回のコミュニケーションの振り返り）が分析対象である。実習期間は2020年９月～2021年２月、全24グループで１グループが３～５名であった。なおコロナ禍の影響で、スケッチブックを用いたコミュニケーションの相手は、18のグループが受け持ちの利用者本人であり、６つのグループが利用者役の学生となった。また、コミュニケーションは、オンラインやオンデマンドでの関わりとなった。オンラインはリアルタイムでのコミュニケーションであるが、オンデマンドは利用者に動画閲覧して貰い、実習指導看護師から利用者の様子を伝達して貰う方法である。各学生がスケッチブックを用いて行ったコミュニケーションは、１日のうちの１時間未満であった。

２．調査期間

2022年３月１日～2022年３月15日

３．データ収集方法

データは、大学管理下の制限つきのformから作成・収集した。収集した内容は、初回のコミュニケーションにおけるスケッチブック活用に関する問いへの記述である。問いは、「スケッチブックに作成した具体的な内容とその意図について記述して下さい」「スケッチブック作成や使用による学びを記述して下さい」「自己の学びと今後の課題について記述して下さい」である。

４．用語の定義

スケッチブック：スケッチブックは、学生が利用者に使用するコミュニケーションツールであり、教員による説明を参考に、文字やイラストやコラージュなどを用いて作成したものである。施設などの実習の場で、学生が初対面時や日々の挨拶やリアリティ・オリエンテーション（以下、R・O）、コミュニケーション・回想・アクティビティの起点、意思疎通のための文字としてなど、その利用方法は多様である。個人間では、言葉とともに見えるように示して、反応をみながらコミュニケーションをすすめている。複数間では、言葉や身振りとともに皆に見えるようにスケッチブックを動かす、または学生自身が動いて見て貰えるようにして使用している。また、遠隔の場合では、居室や共有スペースのテレビにスケッチブックを映してまたはスライド共有して用いている。

利用者：学生が受け持った利用者は要介護３以上の後期高齢者であった。そのため、本研究では利用者を、特別養護老人ホーム、介護老人保健施設、サービス付き高齢者向け住宅のいずれかに入居している要介護３以上の後期高齢者とする。

５．分析方法

分析には、山浦（2012）の質的統合法（KJ法）を用いた。この方法は、分析内容の適切性と各元ラベル・表札・シンボルマークの相互の関係性について研究者間で検討し修正を加えることで、分析結果の信頼性と妥当性の確保に努めることができる。なお、研究者は質的統合法（KJ法）の初心者研修修了者２名、指導者研修STEP1修了者１名、学生時にスケッチブックまたはスライドを使用した経験のある臨床看護師２名である。研究者間で議論してすすめ、指導者研修STEP2修了者１名から作成された表札を確認して貰い、分析内容の妥当性につとめた。

分析の手順は、まずスケッチブックの使用に関する意味のある一文として表現されたデータの単位化を行った。単位化したデータは元ラベルといい、これに数字の符号を使用した。次に元ラベルを広げ、何度もその内容を読み、類似するラベル同士をまとめ、そのグループに含まれる元ラベルの内容を意味する表現の一文を表札とした。その表札をさらに類似するもの同士でまとめ、次の段階の新たな表札にした。このグループ編成を繰り返し行った。最終表札では、含まれる元ラベルを象徴的に集約して表現したシンボルマークを作成し、各シンボルマーク間の関係性を確認して配置した。

６．倫理的配慮

対象者へ研究の趣旨と内容、匿名性の保持と個人情報の保護、参加・不参加による不利益を生じないこと、自由意思の保障を説明し、理解と研究参加について同意した上で同意書作成を以て、研

究参加の承諾とした。なお、本研究にあたり2021年２月に倫理審査委員会の承認（N21−02）を得ている。研究参加の任意性、匿名性、安全性を確保し、得られたデータは厳重に管理した。

Ⅲ. 結果

１. 分析結果

使用した元ラベルは372枚、７段階のグループ化で、最終ラベルは６つとなった。以下、シンボルマークごとに最終ラベルと代表的な元ラベルを示す（表１）。なお、シンボルマークを【　】、最終ラベル＜　＞、代表的な元ラベルの一部を「　」で示す。６つのシンボルマークは、【円滑なコミュニケーションのための工夫】【利用者の特徴に合わせた対応】【スケッチブックの活用方法】【スケッチブック活用の効果】【利用者への看護学生としての承認からのコミュニケーションの促進】【スケッチブック作成・使用における困難感】から構成された。以下に各シンボルマークの内容を概説する。

１)【円滑なコミュニケーションのための工夫】

最終ラベルは、＜学生と年齢差のある利用者の生きてきた背景を理解するために調べ、利用者にも共通する話題を挙げる必要性を感じてスケッチブックを作成する＞であった。学生は、「自分にとっては昔の曲で利用者さんも知っているだろうと思っていても、利用者さんの青春時代はそれ以上に昔であり、利用者さんの生きてきた歴史を知るために、青春時代に流行したものなど調べる必要があると考えた」と利用者の暮らしてきた時代背景などの調べ学習の必要性を示していた。また、利用者の興味・関心に添うように、「高齢者の関心を寄せるような内容であると、途中で好反応を頂けると感じた。特に、同じグループで琴を弾ける人がいたが、そのような特技があると、話が共有でき、高齢者の生活背景を捉えられたりするため、聞いている高齢者も楽しいだろうと思えた」などが含まれた。

２)【利用者の特徴に合わせた対応】

最終ラベルは、＜実習を通して、リモートでのコミュニケーションの難しさ、利用者の反応に合わせた会話、利用者の視野などの加齢変化に合わせた声の掛け方、認知機能に合わせた情報の伝え方、謙虚な姿勢などの必要性について学ぶ＞であった。元ラベルには、「リモート（遠隔実習）であることにより、接続状況などで聞き取りにくくなることもあるため、相手の表情を見ながら必要時何度か繰り返し伝えることも必要であると感じた」「認知機能が低下している方の場合、多くの情報を与えてしまうと理解が追いつかなくなってしまうため、項目ごとにひとつの情報を提供することが大切だと学んだ」などの利用者の加齢変化や障害に合わせた対応についての内容が含まれた。

３)【スケッチブックの活用方法】

最終ラベルは、＜高齢者の難聴などの加齢変化に合わせた文字や色やイラスト等を使用して、自らの趣味などの特徴を紹介し利用者に馴染みのある内容に広げ、一方的な学生の話しではなく利用者のことを知って予防やケアに繋がるように取り組む＞であった。学生は、「一部を折り紙」「絵や色による視覚の情報」「イメージがつきやすいように写真」「クイズ」などの取り組み内容を示していた。また、R.Oとしての「季節感」の他、「生活史の話に繋げる」「嚥下体操の一種としての役割を果たす」「利用者の大切なこと、生きがい、誇りを見つけていく」などの発展的な活用や気づきを挙げていた。

４)【スケッチブック活用の効果】

最終ラベルは、＜スケッチブックは利用者と学生の双方の記憶や理解を助けるガイドになり、話題から信頼関係や情報方収集や看護にもつながることを学んだ＞であった。元ラベルには、「認知症の影響などや記憶障害がある高齢者と会話をする際に、スケッチブックを使用することで、会話できると感じた」「文字や絵・図を載せておくと見た瞬間に自分もどんな話をしたいのか頭に浮かびやすいため、自分の説明、話題作りのためにスケッチブックの活用は良いと感じた」などのスケッチブックの効果を実感したと考えられる内容が含まれた。

５)【利用者への看護学生としての承認からのコミュニケーションの促進】

最終ラベルは、＜利用者と初対面などの学生は、自分の名前、所属、目的、特徴など伝えることで、安心して関わって貰えると考える＞であった。元

表1　最終ラベルと代表的な元ラベル

【シンボルマーク】 ＜最終ラベル＞	代表的な元ラベル（ラベル番号）
【円滑なコミュニケーションのための工夫】 ＜会話が広がるように、円滑なコミュニケーションを図ることが必要である＞	「共通点があれば親近感を抱いてもらえ、〇〇町という内容から歴史や文化という高齢者とも共感して話せる話題が生まれる」（197）
	「自分にとっては昔の曲で利用者さんも知っているだろうと思っていても、利用者さんの青春時代はそれ以上に昔であり、利用者さんの生きてきた歴史を知るために、青春時代に流行したものなど調べる必要があると考えた」（335）
	「高齢者の関心を寄せるような内容であると、途中で好反応を頂けると感じた。特に、同じグループで琴を弾ける人がいたが、そのような特技があると、話が共有でき、高齢者の生活背景を捉えられたりするため、聞いている高齢者も楽しいだろうと思えた」（351）
	「自己紹介からコミュニケーションにつなげるために、自分の情報（好きなもの、好きな季節）だけでなく、相手が話をしやすそうな項目を挙げた」（391）
【利用者の特徴に合わせた対応】 ＜利用者の特徴や反応に合わせて、対応する必要がある＞	「認知機能が低下している方の場合、多くの情報を与えてしまうと理解が追いつかなくなってしまうため、項目ごとにひとつの情報を提供することが大切だと学んだ」（217）
	「自分本位ではコミュニケーションが難しく、相手と同じ時間を過ごすことが難しくなるため謙虚な姿勢で、話す際にも声を低めに心がけたり、ゆっくり話したりして、聞きやすくなる工夫も、聞こうと思うことに繋がると考えるため、心がけたい」（241）
	「高齢者の視野は狭くなっていることから後ろや横から声をかけるのではなくしっかり相手の視野に入ってから声をかけて驚かせないようにすることが重要であると学んだ」（310）
	「リモート（遠隔実習）であることにより、接続状況などで聞き取りにくくなることもあるため、相手の表情を見ながら必要時何度か繰り返し伝えることも必要であると感じた」（342）
	「イラストや話の内容から利用者の反応を見て興味や関心のありそうなものを捉え、会話を広げていくことや、その人をより知っていくことにもつながると感じた」（358）
【スケッチブックの活用方法】 ＜参加型アプローチ、視聴覚への配慮、人生史などを引き出す内容のものを作成する＞	季節感を少しでも感じられると良いと考えたので、スケッチブックの端にもみじやイチョウを切って貼り付けた（009）
	「出身地を話し、できれば利用者の故郷についてお話を聞き、生活史の話に繋げアクティビティケアに活かすようにする」（070）
	「一部絵を折り紙にすることで、内容だけでなく、他の話題にもつながることができるようにした」（080）
	歌うことは身近なため利用者さんと話したときにどのような曲が好きか盛り上がれると感じたので記載した（123）
	「イメージがつきやすいように写真を用いた」（147）
	「言葉だけでは聞こえ辛かったり、理解し辛い場合に、絵や色による視覚の情報もプラスすることで会話をスムーズに行うことができると感じた」（209）
	「絵やイラストを用いることで、会話が広がるということも学んだ。実際に自分は、文字だけではなく、絵や図、イラストがあることで、読もう、知ろうという興味がわき、理解が深められる時があると考えた」（271）
	「話を広げて、ご本人の発語が増えることが嚥下体操の一種としての役割を果たすことも学ぶことができた」（289）
	「スケッチブックの内容として、自分の家族の話や将来の夢などを取り入れたり、クイズを用いて利用者さんが参加できるような方法を考えている人もいて、自分の自己紹介であるけれど、相手に楽しいと思ってもらえるように工夫して作ることが大切だと感じた」（325）
	「会話の中から利用者本人の大切なこと、生きがい、誇りを見つけていくことも自分には必要であると思った」（362）
【スケッチブック活用の効果】 ＜スケッチブックを用いた関わりの効果として、信頼関係の構築や、利用者の記憶や理解を補うなどがある＞	「認知症の影響などや記憶障害がある高齢者と会話をする際に、スケッチブックを使用することで、会話できると感じた」（210）
	「文字や絵・図を載せておくと見た瞬間に自分もどんな話をしたいのか頭に浮かびやすいため、自分の説明、話題作りのためにスケッチブックの活用は良いと感じた」（219）
	「コミュニケーションによって利用者さんについての情報収集ができるため、スケッチブックによる自己紹介は効果的であると考えた」（303）
	「リモート（遠隔実習）で聞こえないときもスケッチブックがあるので、コミュニケーションの1つのツールになることを学んだ」（347）
	「自己紹介はただ自分のことを話すのではなく、話を広げて対象者の方自身が自分のことを話して頂けるようにすると信頼関係構築だけでなく、その方らしい看護を考えることにつながることを学んだ」（246）
【利用者への看護学生としての承認からのコミュニケーションの促進】 ＜利用者に看護学生の立場や自分を認めて貰い、コミュニケーションをはかりたい＞	「特に好きなことについては、踊ることが好きという、自分が最もアピールしたい内容であったが、加えて高校時代にチアダンスをやっていたこと、それに伴いスマイルという言葉であったり笑顔そのものが好きという話の展開に繋げた」（054）
	「まずは自分の名前を名乗り、自分が何であるのかを相手に知ってもらうことから始めることで、安心してコミュニケーションを図ることにつながると考えた」（074）
	「名前は自分を利用者さんに分かってもらえるように、また由来は1つの個性として考えられるので自分自身がどんな人か伝えたい」（122）
	「スケッチブックの名前の漢字によって、きれいな名前ねと利用者さんが発言していたことから、言葉だけでは把握できない情報からコミュニケーションをつなげることができると考えた」（301）
	「スケッチブックを作った時に名前だけ紹介していたため大学名や所属、看護師になるために勉強していることも伝えると、より伝わりやすい自己紹介に繋がると感じた」（370）
【スケッチブック作成・使用における困難感】 ＜スケッチブックの作成・使用にあたり困難さを感じた＞	「レイアウトや色味ではなく、どうしたら伝わりやすいのかを考えて作成したので頭を使った」（205）
	「スケッチブックについて、話に夢中になると持つ手が下がってしまったり、目線に合わせられない位置になってしまうことがあるため、直接会える際はスケッチブックを机の上に置くことや、なるべく目線に合うように意識することが重要だと感じた」（220）
	「話す際に少し早口になったこと、スケッチブックが上手く見せることができなかったことが反省点である」（299）

ラベルには、「まずは自分の名前を名乗り、自分が何であるのかを相手に知ってもらうことから始めることで、安心してコミュニケーションを図ることにつながると考えた」「スケッチブックを作った時に名前だけ紹介していたため大学名や所属、看護師になるために勉強していることも伝えると、より伝わりやすい自己紹介に繋がると感じた」などのコミュニケーションの発展を意図している内容が含まれた。

6)【スケッチブック作成・使用における困難感】

最終ラベルは、＜スケッチブックの作成にあたり、伝わりやすさ、見えやすさなどに難しさを感じる＞であった。元ラベルには、「レイアウトや色味ではなく、どうしたら伝わりやすいのかを考えて作成したので頭を使った」「話す際に少し早口になったこと、スケッチブックが上手く見せることができなかったことが反省点である」などの困難さを感じた内容が含まれた。

2．各シンボルマーク間の関係性と配置

老年看護学実習におけるコミュニケーションツールとしてのスケッチブックの使用について、学生が捉えた内容を、図1に示した。各シンボルマーク間の関係性について説明する。学生は、【円滑なコミュニケーションのための工夫】として、＜学生と年齢差のある利用者の生きてきた背景を理解するために調べ、利用者にも共通する話題を挙げる必要性を感じてスケッチブックを作成する＞ことを行っていた。また、【利用者の特徴に合わせた対応】について、＜実習を通して、リモートでのコミュニケーションの難しさ、利用者の反応に合わせた会話、利用者の視野などの加齢変化に合わせた声の掛け方、認知機能に合わせた情報の伝え方、謙虚な姿勢などの必要性について学ぶ＞

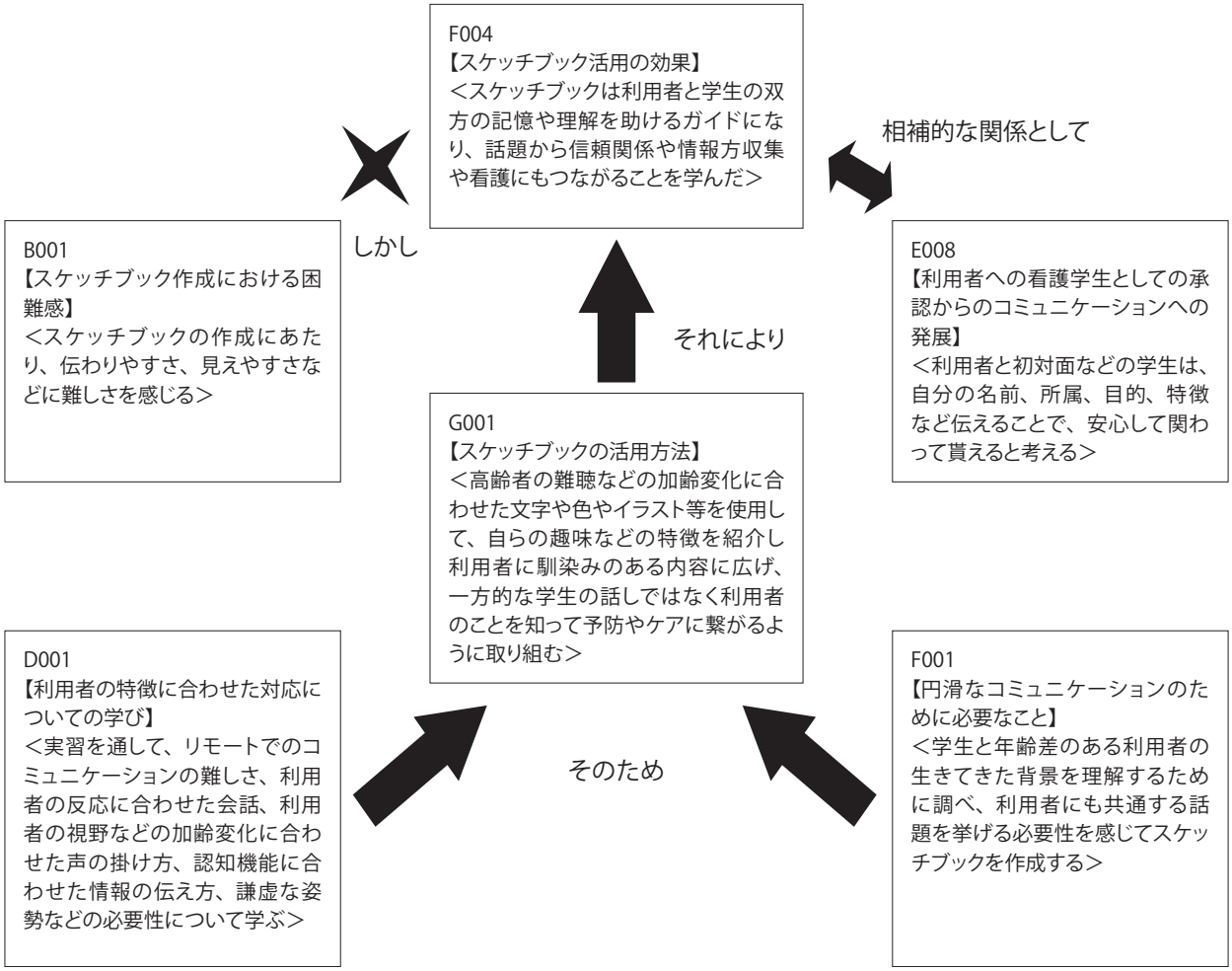

図1．各シンボルマーク間の関係性と配置

機会を得ていた。そのため、【スケッチブックの活用方法】として、＜高齢者の難聴などの加齢変化に合わせた文字や色やイラスト等を使用して、自らの趣味などの特徴を紹介し利用者に馴染みのある内容に広げ、一方的な学生の話しではなく利用者のことを知って予防やケアに繋がるように取り組む＞ことにつながっていたと考えられた。それにより、【スケッチブック活用の効果】として、＜スケッチブックは利用者と学生の双方の記憶や理解を助けるガイドになり、話題から信頼関係や情報方収集や看護にもつながることを学んだ＞ことが示されたと考えられた。【スケッチブック活用の効果】の相補的な関係として、【利用者への看護学生としての承認からのコミュニケーションの促進】という＜利用者と初対面などの学生は、自分の名前、所属、目的、特徴など伝えることで、安心して関わって貰えると考える＞という学生の思考があった。しかし、【スケッチブック作成・使用における困難感】として、＜スケッチブックの作成・使用にあたり、伝わりやすさ、見えやすさなどに難しさを感じる＞ことも示された。

Ⅳ. 考察

抽出されたシンボルマークやシンボル間の関係や配置に着目し、以下に考察する。

学生と高齢者との関わりの困難さの理由に世代差（清水 2007,森 他 2017）があるが、【円滑なコミュニケーションのための工夫】では、学生が利用者との年齢差による障壁を埋めるべく、時代背景や若かりし頃に流行したものなどを調べ、共に楽しめる話題を探していることが窺えた。高齢者の平均寿命、高齢化率は上昇を続けており（内閣府 2023)、学生との世代差は今後も開くことが見込まれる。そのようななか、認知症のある患者への効果的介入の１つとして、患者の生活史への着目（日本老年看護学会老年看護政策検討委員会 2014）がある。したがって、認知症のある高齢者とのコミュニケーションでは、高齢者の年齢や住まう地域などの少ない情報からでも生活史をひも解いていく必要があると考える。

そして学生は、【円滑なコミュニケーションのための工夫】を行ったうえで、【利用者の特徴に合わせた対応】として、高齢者の難聴などの加齢変化や、認知機能に合わせた対応方法や姿勢の必要性であると考えられた。加齢性難聴は65歳以上で急増し（内田 他 2012)、認知症は約700万人（2025年推計）（二宮 2015）と報告され、今後ますます加齢変化や、認知機能に合わせた対応が重要となるだろう。また実習学生では、認知症による症状を知識として理解できない（髙野 他 2016）ことが報告されている。本研究では、「認知機能が低下している方の場合、多くの情報を与えてしまうと理解が追いつかなくなってしまうため、項目ごとにひとつの情報を提供することが大切だと学んだ」ことが記されていた。この前半部分は、学生がスケッチブックに用意したものを自分のペースで披露した結果、高齢者の「理解が追い付かなかった」と考えられる。「項目ごとにひとつの情報を提供する」とスケッチブックの利用方法の改善を通して、認知機能の低下に応じた関わり方を学んだことが推察される。スケッチブックの活用において、【円滑なコミュニケーションのための工夫】【利用者の特徴に合わせた対応】は、高齢者の背景や特徴を慮り、困りごとに合わせて工夫・対応した結果であろうと考える。

具体的な【スケッチブックの活用方法】では、Bourgeois（1990)、黒川（2008)、吉田（2010)、岩澤ら（2020）が示すコミュニケーションの工夫に類似して、文字・絵・写真・歌の他、折り紙も用いられた。折り紙だが、ヨーロッパでは19世紀前半からorigami therapyとして脳や身体の障害のリハビリテーション（Hand eye coordination and delicate motor skills）や、認知症の心のケア（peaceful state mind）にも使用されている（Achilleos 2016)。学生がスケッチブックにコラージュした折り紙から、創作活動への移行があれば、origami therapyの要素も加わるだろう。

学生はスケッチブックの使用を通して、R・O、誤嚥予防ケア、高齢者の生きがい・誇りへのつながりを感じていることを示していた。季節や場所など見当識に働きかけるR・Oについて、Kidwood（2005）は、認知症の人のその人らしさを認めるケアとしている。また、正木ら（2018）は、高齢者の日常倫理に基づく健康管理の指標の１つとし

て、「日常のケアで最大限の効果が高齢者に得られるようにして行う」ことを挙げている。日常のケアを行いながらも、季節感を含むR・Oを意識したコミュニケーションが加われば、認知症の人の記憶に触れることができるかもしれない。そして、高齢者の日常生活・地域社会への参加に関する調査（内閣府 2022）では、75～79歳の7割以上が「生きがいを感じない」と回答しており、その割合は60～64歳の10倍を超えている。このことからも、スケッチブックの活用は、【円滑なコミュニケーションのための工夫】を行いつつ、【利用者の特徴に合わせた対応】となるようR・Oや、生きがいも含め最大限の効果があるような【スケッチブックの活用方法】であることが期待される。

さらに【スケッチブック活用の効果】では、「認知症の影響などや記憶障害がある高齢者と会話をする際に、スケッチブックを使用することで、会話できると感じた」ことが記されている。学生は、高齢者の記憶障害などによる意思疎通の困難さ（清水 2007, 田中 他 2012, 森 他 2017, 中川 他 2019）を感じたことが窺える。しかし、スケッチブックの使用によって学生の「できる」気持ちと高齢者の記憶を補完し、双方にとってコミュニケーションを助けたとも考えられる。また、認知症の高齢者との関わり体験の不足（森 他 2017）があった場合の学生のストレスは、コルチゾールを分泌させ実行機能の低下をまねく（山川 他 2018）ことがあり、「文字や絵・図を載せておくと見た瞬間に自分もどんな話をしたいのか頭に浮かびやすい」ことは、学生自身にとってのガイド的な役割機能をもつ可能性を考える。それに加え、【利用者への看護学生としての承認からのコミュニケーションの促進】では、学生が高齢者へスケッチブックを用いた自己紹介が示されている。認知症では、診断的特徴として思い出すことの困難さが含まれる（American Psychiatric Association 2013）。また、看護職の倫理綱領（日本看護協会 2021）には、知る権利と自己決定の権利が示されている。人や出来事を忘れたとしても、本人の意向に応じた選択ができる働きかけは必要である。スケッチブックは、自己紹介を含め作成したものが繰り返し使用できるため、忘れることがある場合でも倫理的な関わりを助ける可能性があると考える。

その一方で、【スケッチブック作成における困難感】が示されていた。学生は、看護の対象に応じた制作や表現する技術を学んできているとはいえず、利用者の情報が少ないなかでの作成であったことも影響したかもしれない。世界で最も高齢者の割合が高いわが国では、科学的介護や、スマートエイジングに向けテクノロジーを利用した開発（Moller et al. 2019）が進行中である。コロナ禍の実習であったため、リモートやオンデマンドやスライドを使用したが、高齢者と学生の双方にとって持続可能なデジタル技術の活用方法の検討も必要と考える。

調査対象者は限定的な参加者である。また、スケッチブックの利用は、コロナ禍におけるオンライン・オンデマンドなどの多様な実習スタイルのもとで行われており、利用者本人ではなく高齢者役を演じた学生も含まれ、通常の臨地実習での使用結果と異なることは否めず、今後の課題である。

V. 結論

本研究では、スケッチブックを用いた高齢者とのコミュニケーションで学生は、①「対象者の世代・加齢変化・認知機能に合わせスケッチブックを準備し、円滑なコミュニケーションとなるように工夫・対応する」、②「スケッチブックには、文字・絵・写真・歌・折り紙等を用い、会話だけでなくR・Oや誤嚥予防ケアなどとしても使用でき、高齢者の生きがいや誇りへのつながりを感じる」、③「スケッチブックは高齢者の想起を補うとともに、学生にとってガイド的な役割をもってコミュニケーションを促進する」ことの可能性が示された。しかし、スケッチブックの作成・使用における困難さがあったため、ガイドなどの学習ツールの補充が必要と考えられる。

VI. 謝辞

快く研究にご協力下さった研究参加者の皆さまに心より感謝申し上げます。

本研究の一部を第42回日本看護科学学会学術集会で報告した。

Ⅶ. 利益相反

本研究における利益相反は無い。

文献

Achilleos,B.（2016).Origami Therapy, Dennis Publishing, England

American Psychiatric Association（2013）. Diagnosis and Statistical Manual of Mental Disorders Fifth Edition／日本精神神経学会監修.（2014）DSM－5精神疾患の診断・統計マニュアル，医学書院

Bourgeois, M.S.（1990）. Enhancing conversation skills in patients with Alzheimer's diseases using a prosthetic memory aid, Journal of applied analysis, 23, 29−42

Claude, E.S., Weaver,W.(1964). The Mathemathecal theory of communication, The University of Illinois Press,1−125.

岩澤夕喜，笹島京美（2020）．回復期リハビリテーション病棟での心理的アプローチ，作業療法，39(5)，597−604.

Kidwood, T. Dementia Reconsidered the person comes first／訳;高橋誠一(2005). 認知症のパーソンセンタードケア 新しいケアの文化へ，筒井書房

厚生労働省（2018）．介護保険事業報告：結果の概要：平成30年度，2023.8.21アクセス，https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/84-1.html.

厚生労働省（2019）．看護基礎教育検討会報告書，2023.8.21アクセス，https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf

厚生労働省（2022）．令和4年国民生活基礎調査の概況，2023.8.21アクセス，https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa22/dl/14.pdf

黒川由紀子（2008）．認知症と回想法（1），金剛出版，東京

正木治恵，谷本真理子，黒田久美子，他（2018）．高齢者の主体的な健康を創出・支援する老人専門看護技術の評価指標の開発

Moller,J., Bevilacqua,R., Browne,R., et al.（2022）, User perceptions and needs analysis of a virtual coach for active and healthy ageing – An international qualitative study, International journal of Environmental Research and Public Health, 19, 1−38.

森幸弘，中尾奈歩，福田峰子，他（2017）．老年看護学実習における学生が認識する老年者とのコミュニケーション困難の内容と要因，生命健康科学研究所紀要，14，35−44.

内閣府（2022）．高齢者の日常生活・地域社会への参加に関する調査，2023.8.21アクセス，https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?stat_infid=000032207110

内閣府（2023）．令和5年版高齢社会白書，2023.8.21アクセス，https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2023/zenbun/05pdf_index.html

中川孝子，熊谷和可子，木村ゆかり，他（2019）．高齢者施設における老年看護学実習での学生の困難感に関する実態調査，青森中央学院大学研究紀要，30・31，53−60.

中原順子，佐野望，野田陽子，他（2014）．高齢者看護学教育における認知症模擬患者を導入した演習での学び，共立女大看誌，1，17−24.

日本看護協会(2021). 看護職の倫理綱領, 2023.8.21アクセス, https://www.nurse.or.jp/nursing/assets/statistics_publication/publication/rinri/code_of_ethics.pdf

二宮利治（2015）．厚生労働科学研究費補助金（厚生労働科学特別研究事業）日本における認知症の高齢者人口の将来推計に関する研究，1−18.

清水裕子（2007）．看護学生の老年者との対話の問題と特徴，老年看護学11(2)，56−63.

髙野真由美，松本佳子（2016）．老年看護学実習Ⅰで看護学生が認知症高齢者との関わり時に抱いた気持ち，川崎市立看護短期大学紀要，2(1)，31−38.

田中和奈，福田峰子，安藤好枝，他（2012）．老年看護学臨地実習における実習時期からみた学生の困難状況と対処行動，生命健康科学研究所紀要，19，84−101.

戸田由利亜，谷本真理子，正木治恵（2017）．他所と共に在る認知症高齢者の表現する姿，千葉看

護会誌，22(2)，1−10.
内田育恵，杉浦彩子，中島務，他（2012）．全国高齢難聴患者数推計と10年後の年齢別難聴発症率－老化に関する長期縦断疫学研究（NILS-LSA）より，日本老年医学会雑誌，49(2)，222−227.
United Nations（2023）COVID-19，2023.8.21アクセス，https://www.un.org/coronavirus
山川香織，大平英樹（2018）．ストレス下における不合理な意思決定－認知機能の側面から－，生理心理学と精神生理学，36(1)，40−52.
やまだようこ，山田千積（2018）．糖尿病患者のビジュアル・ナラティブ－三項関係のナラティブモデル，ナラティブとケア，9，11−20.
山浦晴男（2012）．質的統合法入門考え方と手順，医学書院，東京
吉田輝美（2010）．コミュニケーションツールとしてのコラージュ法の検討 芸術療法を用いたコミュニケーションの広がりについて，仙台白百合女大紀，14，115−129.

Abstract

Objective: This study aimed to elucidate the use of sketchbooks in communication during geriatric nursing students practical training.
Methods: A qualitative synthesis method was used to analyze the responses of 57 third year university students, constituting 59.4% of the participant pool.
Results: The analysis yielded several factors including the utilization techniques of the sketchbook, adeptness in fostering smooth communication user attributes, the impact of sketchbook implementation nursing student user approval of sketchbooks for communication enhancement and challenges in creating a sketchbook.
Conclusions: Students prepared sketchbooks to engage in conversations and provide care. These sketchbook s served as guide s aiding both clients and students in recollection and comprehension.